

生徒の学びを深めるための 教師の場づくり、発問とは

ファシリテーターとしての教師には、生徒にどのような働き掛けをすることが求められるのだろうか。アクティブ・ラーニングを実践する2人の教師に、現在の取り組みの概要と課題を紹介してもらいながら、生徒同士が主体的に学び合う場をつくり、個々の思考を活性化・深化させるために必要な視点について、拓殖大の石川一喜准教授と語り合ってもらった。

「教える専門家」かつ
「共に学ぶ専門家」に

編集部 アクティブ・ラーニング（以下、AL）における教師の役割について、まずは石川先生から改めてお考えをうかがえますか。

石川 オックスフォード大学の調査では、近い将来、約50%の仕事がロボットに取って代わられるという結果が出ています。特に、物流や製造業などの仕事でその割合が高く、教師はそうした可能性の低い職業だと言われています。しかし、私たち大
学教員において、教育者としての仕事ぶりはこれまでと変わらないだろうと安心している人は多くはあり

ません。例えば、基本事項や基礎知識は前もって家などで映像の講義を聴講することで身に付け、大学では発展的な課題に取り組みといった反転授業が普及すれば、教えるだけの講義をしている教員はICTに取って代わられるかもしれません。これは大学教育の話ですが、中学校や高校の先生方と話しても、これまでとは違う教師像を持たなければ時代に取り残される可能性があると感じている方は少数ではないと思います。教師は「生徒に教える専門家」かつ「生徒と共に学ぶ専門家」へ、生徒は「教わる存在」から「自分たちで学ぶ存在」へと変革が求められており、その要になるのがALだと考えています。

大神 私が世界史を教えていて、いつも思うのは、「高校の授業であっても、本当の答えはほとんど分からない」ということです。紛争や貧困がなぜ起こるのか、それらを解決するためには何をすればよいのか、私には分かりません。教師にも分からないことばかりなのですから、なるべく授業では教え込まず、生徒と共に考えることを心掛けています。グローバル社会で必要な力は、既存の知識・技能を習得する授業だけでは身に付きません。生徒も私自身もどんどん変化していくような授業を展開したいと思っています。

森内 学科試験では良い成績が取れる生徒も、小論文ではペンは止まってしまうことも少なくありません。これは、答えがある問題に正解できる勉強を重視してきた教育の限界ではないでしょうか。自分の意見を述べるためには、他者の意見を傾聴した上で自ら考え、練り上げていく力が必要であり、そのような力を授業の中



拓殖大国際学部准教授
石川一喜 しかわ・かずよし

で育てていきたいと考えています。

クローズドクエスチョンから オープンクエスチョンへ

編集部 先生方がそれぞれどのような授業を実践しておられるのか、概要をご紹介いただけますか。

大神 私は10年以上前から、板書の時間を節約するために全ての授業でプレゼンテーションソフトを活用しています。また、私の説明を聞くだけでなく、映像や音声を交えた授業の方が生徒は内容が理解しやすく、



富山県・私立片山学園中学・高校
森内梨絵 もりうち・りえ

教職歴7年。同校に赴任して8年目。担当教科は国語。

定着率も高いように実感しています。更に、授業に生徒同士の話し合いを入れることで、知識の定着をより強固にすると共に、生徒の視野を広げたり考えを深めたりすることを意識しています。

授業の冒頭で心掛けているのは、生徒に課題意識を持たせることです。例えば、「第三世界の分化」の単元ではまず、飢餓状況と貧困状況を示した世界地図を見せます。最初はある程度のデータなのかを明かさずに、生徒同士で考えさせることで興味・関心を高め、飢餓状況と貧困



福岡県立小倉南高校
大神弘巳 おがみ・ひろみ

教職歴23年。同校に赴任して21年目。主幹教諭。進路指導主事。担当科目は世界史。

状況の地図がほとんど同じであることに気付かせることにより、課題意識を高めめます。

その中で、飢餓の原因や貧困がもたらす問題など、答えが複数ある問い、または明確な答えがない問いを投げ掛けてグループやペアで考えさせます。その後、本当に世界中で食糧は足りていないのか、貧困の原因は何かなどについて写真やグラフを使って解説し、南北問題や南南問題について理解させ、最後に「世界の紛争・貧困・飢餓などの諸問題を解決するために私たちが出来ることは何か」について、次の授業で話し合うことを予告して授業を終えます。

授業中も意見を言いたくなくてうずうずしている生徒、授業が終わった後にも話し合っている生徒がいる時は、授業がうまくいったと感じます。寝ている生徒は1人もいませんし、興味・関心を持って自分でどんどん調べ学習をする生徒もいます。

石川 ある程度答えが絞り込めるクローズドクエスチョンをいくつか投げ掛けた上で、答えのないオープン

クエスチョンへ移行していくという方法は、生徒が発言しやすい場をつくる上で非常に有効だと思います。

富山県・私立片山学園中学・高校

◎北陸最大規模の学習塾「富山育英センター」が富山県初の中高一貫校として創設。「孝・恩・徳」を校訓に掲げた全人教育を標榜。土曜の学習や希望者対象の夜間の特別授業など、豊富な学習時間を確保して生徒の志望進路の実現を支援する。

◎設立 2005（平成17）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約100人

◎2015年度入試合格実績（現浪計）

国立公立大は、東北大、東京大、東京工業大、名古屋大、大阪大などに57人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ260人が合格

◎URL <http://www.katayamagakuin.jp/>

福岡県立小倉南高校

◎「自主・創造・親愛」の校訓の下、「自ら学び自ら考える能力」の育成に取り組み。同校では各教科で積極的にA.Lを取り入れており、2015年度入試では国立公立大のA.O・推薦入試に54人が合格するなど成果を上げている。

◎設立 1906（明治39）年

◎形態 全日制・定時制／普通科（全日制は一般・英語の2コース）／共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2015年度入試合格実績（現浪計）

国立公立大は、筑波大、九州大、北九州市立大などに89人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ200人が合格

◎URL <http://kokuraminami.kfu.ed.jp/>

オープンクエスチョンは、思考を深める、あるいは思考の活性化につながるモヤモヤ感を持たせるために有効ですが、いきなりそのような問いを投げ掛けても生徒は戸惑ってしまいます。クローズドクエスチョンで場を温めてから答えのない問いへ移行することで、思考がより深まり、モヤモヤ感が課題に対する興味・関心を高めます。特に、答えのない問いを投げ掛けて授業を終わるのは、次の授業への期待感の醸成と思考の継続を促す、授業後の静かな学びのための場づくりだと思います。

森内 私が高校時代に受けた世界史の授業は、出来事やそれに関係する人物などを古代から順番に教科書で確認していくというものでした。過去の出来事なので、現代とのつながりが感じづらい時もあり、重要項目を覚えて定期考査などは何とかしのげるものの、歴史の流れの理解には至らないこともあったと記憶しています。大神先生の授業は、現代社会の問題から世界史のテーマに入っていくので、今の自分とのつながりがイメージしやすく、歴史を勉強する必然性も実感できそうですね。



「A」によって生徒同士や生徒と教師との関係が豊かになることで学力向上の土壌が育まれる」石川

ささいな疑問・関心の中に思考を活性化するヒントがある

森内 私の国語の授業では、小説と評論では異なる手法を採っています。私の高校時代の現代文は、先生の誘導で1つの巧みな解釈が黒板上で出来上がり、それを覚えてテストに臨めば、ある程度点数は取れるというものでした。ただ、自分の考えとは異なる解釈である場合も多く、先生の読みを押し付けられているようで面白くありませんでした。大学で初めて文学作品の多様な解釈に触れたことで、文学作品を読むのが楽しくなり、生徒にもそういった体験をさせたいと思ったのが授業の原点です。そこで今、生徒が楽しみながら学べる授業をしたいと考え、小説は全てA1で授業をしています。小説では、読解に入る前にまず、生徒に、作品を読んでみて疑問に



「A」で高まった興味・関心をその後の主体的な学習につなげる工夫を模索したい」森内

思ったことや関心を持ったことを書き出してもらい、それらを基に授業を組み立てます。語句の意味などの基本事項の確認は一斉授業で行いますが、その後は全てグループ学習で進めます。1コマの授業で1つか2つの問いをグループで考えさせ、1作品につき5、6コマのペースで進め、最終的にはグループで考えた解釈を発表させます。解釈が多すぎて取捨がつかない場合は、私が4つくらいに大別して、後日プリントにして配布し、考えが似ている生徒同士でグループをつくり、話し合わせます。難しい作品の場合は、書店にあるような作品紹介のポップを作らせ

ることもあります。

解釈を考える際、重視しているのは根拠を述べさせることです。根拠がなければその解釈は単なる想像や感想にすぎません。論理に矛盾がある場合は、それを解きほぐして矛盾点を焦点化できるようにアドバイスします。定期考査でも、解釈を述べた設問では、きちんと根拠が書いてあり、論理が通っていれば、模範解答と異なっても正解とします。

大神 多様な解釈を認めてもらえるのは、生徒もうれしいでしょうね。特に、テストは答えが1つという「常識」とらわれず、多様な解釈が存在する場合もあるということを示すことで、生徒の思考を活性化していると思います。多様さを受け入れるのは、教師として勇気が要りますが、公民の授業に応用して、裁判の判決と判例の関係、法律の解釈などに当てはめることが出来ると思います。



「授業に主体的に参加させるため、生徒の気質や知識量に見合った発問を心掛けていきたい」
大神

場の力を信じるのが ファシリテートの基本

森内 一方、評論では、筆者の主張や論展開を把握させることに主眼を

と面白くなるといったことを生徒が実感できれば、授業ではもつと自由に語ってみようと思うはずで

置いてA1を展開していきます。例えば、初読の段階でキーワードを洗い出させて何のテーマについての評論なのか、ペアで確認させたり、グループで入試問題の満点解答を作成させたりすることもあります。生徒一人ひとりが「プチ教師」のような役割を持って、問い掛け合い、分からないところを教え合って、最終的に発表する。そうした授業を繰り返すことで、生徒は主体的に評論と向き合うようになり、学力面でも、特に記述力が格段に高まります。A1によって思考が深まっているということもありますが、活動を通して教師が生徒と深くかわかることで信頼関係が醸成され、私の指導や助言が生徒に浸透しやすくなっていることも大きいと思います。実際、生徒たちはグループワークが大好きで、

「もつと話し合いたい、考えたい」と学習への意欲を私に訴えます。

石川 教師と生徒の関係を豊かにすることで、生徒が学びを肯定的に捉え、間接的に学力が身に付くという考えは重要ですね。ファシリテーターの大原則は場の力を信じることです。生徒は一人ひとり多様な視点を持っており、中には教師より鋭いものもあります。生徒の力を低く見積もれば、生徒のやる気は下がり、教師のファシリテートの質も下がります。逆に、生徒を信頼すれば、生徒の思考の質が変わり、学びに向かう行動やその結果得られる学力も変わるといい。そういう良いスパイラルに入っていく……そうした経験は多くの先生方がお持ちだと思えます。まさに、森内先生はそのような場づくりを大切にしているのだと思います。

何を言っても大丈夫な 「場」をつくるための発問

大神 今、高校現場では、生徒の学力が多層化したため、授業のテーマや発問の設定にとっても配慮が必要

になっていきます。私の授業でも、問いが難しかったのか、グループでの話し合いに参加しているように見えて、メンバーに同調しているだけの、言わばただ乗りする生徒が見られることがあります。課題意識や興味・関心を深めるためにどのような素材を選ぶか、生徒の気質や知識量に合わせてどのような発問をするのかという点にいつも気を配っています。

石川 話し合いにただ乗りする生徒に対しては、損をしているのは自分自身であることに気付かせる必要がありますよね。A1の理想は、生徒全員がファシリテーター的存在になり、お互いに学びを深め合うようになることです。自分の発言や態度によって学びの場が変わった、自分の意見が取り上げられたといった体験を重ねていくことで、主体的に学びに参加するようになるのではないのでしょうか。「私、分からないんだけれど」といった正直な一言が、周囲の学びを更に深くするきっかけになるのだと理解させたいものです。口を開かない生徒は、「その意見

はおかしい」と否定されるのが怖いのです。何を言っても大丈夫だという状況をつくるためには、教師が「ジャッジされない問い」を用意しておくことも有効です。例えば、4×4のマスに「楽しい」「悲しい」など、様々な形容詞を用意して、課題や問いに対して感じた気持ちに近いものを選び、なぜそう思うのかを話し合います。自分の気持ちを述べるのに正解・不正解はありません。生徒が伸び伸びと発言できる安心感を醸成することも、ファシリテーターとしての教師の大切な役割です。

話し合いのルールの設定が 生徒のファシリテート力を高める

森内 全ての生徒が議論に参加している状況でも、話の上手な生徒の意見に全体が引っ張られることもありえます。せっかく良い意見を出し掛けている生徒が、埋もれてしまうことも少なくありません。

石川 埋もれそうな意見は、机間巡視で拾い上げることも出来ると思います。「○○さん、何か言いたそうにしていなかったか？」といった投げ掛けをして、異なる視点での議論の

Column

石川先生からのアドバイス 思考を活性化させるアイデア例

●リフレーミングして問い掛ける

文字通り、物事の意味などを解釈する時に、通常の枠組み（フレーム）とは別の枠組みで捉え直すことです。「今は当たり前だけれど、100年先だとどうなるだろう」「日本と外国では同じ受け止められ方だろうか」「○○を知らない人に対して、どう説明すれば分かるだろうか」など、ものの見方を変える問い掛けを行うことによって、それまで見えなかったものが可視化し、生徒の思考を活性化させるきっかけになります。

●リフレクションを課題にする

多くの高校では、1コマの授業時間は50分程度です。重要事項の確認など授業内で行うべきことは多いでしょうから、A L型授業に慣れないうちは、授業時間内に活動を終わらせるだけで精いっぱいということもあるかもしれません。そうした時には、授業の最後に、授業での気づき、振り返りを課題として投げ掛け、その振り返りをグループで共有することから次の授業をスタートさせることも可能です。これは、あえてモヤモヤ感を抱かせ、次回まで思考を継続させる動機付けとして有効です。

●クローズドクエスチョンとオープンクエスチョン

心の状態と体の状態は一致しています。授業序盤では、「YES」「NO」どちらかを選択して答えるクローズドクエスチョンを投げ掛けるようにすると、生徒が活発に言葉を発する過程で場が温まり、深く思考する準備が整っていきます。その後、正解があるとは限らないオープンクエスチョンに移行すれば、様々な意見が飛び交い、思考を深めていくきっかけが出ていきます。

可能性を示すことも必要です。

また、あらかじめ話し合いの前提となるルールを決めておくのも1つの方法です。何もルールがない状況で「あなたはしゃべりすぎだ」と言うときつくなりますが、「人の話を遮らない」といったルールを決めておけば、注意がしやすいはず。逆に「今日は1人1回話そう」というルールを決めておけば、話していない生徒に対して、「今日は静かだね」「反対意見はないか？」と自然と話を振ることが出来ます。「他人を攻撃しない」というルールがあれば、強く主張しすぎる生徒に対して自制

を促すことも可能です。ただ、ルールはあまり多すぎない方がよく、最低限押さえておくべきものを簡潔に示すことが大切です。ルールに沿って話し合いを進める中で、生徒一人ひとりがファシリテーターとしてのスキルを磨けば、教科学習の成果のみならず、将来、社会で協働できる力の育成にもつながります。

大神 私もグループワークの際は3

つ程決まりを設けます。「人の意見を否定しない」「みんなで話し合う」「最後は楽しかったと言えるような場にする」です。ただ、それでも議論に熱中してしまい、自分の主張を

押し付けようとする生徒は出てきます。そこは私の指導力が足りていない点だと思えます。逆に、周りの生徒の意見を引き出そうと頑張っている生徒に、「仕切りすぎないように」となどと声を掛けたのでは、場づくりとして逆効果です。私たち教師は、グループやペアの状況を的確に読み取らなければいけません。

石川 言葉を発しなくても、イラストや図で表現する、造形物を作ってみるなど、言葉以外にも表現の仕方はいろいろあります。先程、森内先生の実践の中にポップを作る活動がありました。話すのが苦手な生



徒が活躍できるチャンスになりますし、思考を活性化の上でも非常に有効だと思います。イラストやポップという表現方法を選んだからこそ、言葉からだけでは気付かない見方、考え方にたどり着くこともあるでしょう。アウトプットの仕方でも多様にする事で、思考が活性化・深化する可能性は更に高まります。

一般に、教育機会の平等は就学率で測られますが、多様な学び方を提

供することも、もう1つの機会平等

と言えるのではないのでしょうか。成績の良い生徒の多くは、講義型の授業で学力を伸ばすことが出来ます。

しかし、黙々と1人で学ぶのが好きな生徒もいますし、体験的な学びを通して学力を向上させる生徒もいます。ある方法では学びにくい生徒も、別の方法なら生き生きと学ぶことが出来る。生徒に多様な学びの場を提供するという意味でも、ALは大きな可能性を秘めていると思います。

授業の楽しさを通じて 主体的に学ぶ姿勢を引き出す

森内 私が今感じている課題は、授業で高まった興味・関心を、入試に必要な学力の向上へと確実につなげていくことです。上位層は、授業で高まった興味・関心をその後の主体的な学習に結び付けることが出来ません。下位層も、授業を楽しみ、主体的に参加することで基礎学力が定着しています。一方、中位層の生徒は、授業の様子から、興味・関心が高まっていることは読み取れるのですが、

それをペーパーテストの結果に結び付けるのには、もう一工夫が必要だと感じています。中位層においても、上位層と同じように、主体的な学習行動に結び付けていく仕掛け、授業後も考えさせる工夫が必要です。

大神 主体的に学ぶ姿勢を引き出すには、大きく2つの考え方があると思います。まず、授業の楽しさを通じて、「もっと知りたい」「もっと学びたい」という欲求を喚起する方法。そして、希望する将来像などから自分で学習の必要性に気付かせて、自ら学びに向かわせる方法です。どちらの方法においても、生徒を「その気にさせる」ことが大切です。私は、キャリア教育など教科学習以外の働き掛けも重要になると思います。

石川 協同学習と協同学習という言葉があります。同じような意味で使われることが多いのですが、あえて違いを明確にするのなら、協同学習は、グループワークを通してみんなで1つの答えに効率的にたどり着こうとするものであり、協同学習は、答えのない問題にみんなで向き合う

ものです。私は、ALは本質的には後者なのだと考えています。集団で学び合うという「活動ありき」ではなく、その中の思考の活性化や深まり、更には葛藤、もどかしさにこそ価値があり、それらが生徒の成長の糧になるのです。生徒が自ら学び始めるまでには時間が掛かることもあります。森内先生の授業のように、下位層の生徒が1人では勉強できなくても、みんなと一緒に楽しく学べる、考えられるという状況は、それだけでも大きな意味があります。中位層の生徒に対して、学びに対する肯定感を生かして、1人でも考え続けられる自習プリントを与えるなど様々な方法を試み、多様なアプローチで生徒の潜在的な学習意欲を刺激できるとよいですね。

次のページからは、森内先生、大神先生の授業実践をご紹介します。座談会を経てそれぞれの授業を更に工夫した点や、新たに気付いた課題などが明らかになっています。

